

## 歴史の転機を生きるヨーロッパ — 仏・独の現状と“政治劣化のアメリカ” —

TMF(日仏メディア交流協会)会長 外交評論家  
磯村 尚徳

### 1. はじめに

皆様こんにちは。この地域でも台風で被災された方々も多いかと思えます。まずもってお見舞いを申し上げます。今日ここに伺った経緯ですが、パリの日本文化会館の館長をしていた頃、私が講演をしたときに聴衆の中に当時留学で来ておられた見目洋子先生がおられました。お帰りになってから現在は専修大学の商学部の教授をされておりますが、もう十数年親しくさせていただいてまして、その見目先生の恩師が佐倉市国際文化大学の学長の片岡先生なのです。そういう訳で片岡先生とも親しくさせていただいておりまして、今日こちらに伺ったというわけです。

佐倉市国際文化大学は、30周年ということですが、皆さんご存じのように30年というのは **one generation**、ひとつの世代ということです。広辞苑に依れば、世代というのは同じ頃に生まれ、同じような経験をして、考え方も似たような人達のことを言うことがあります。つまり一つの世代が今日をもって終わって、明日から新しい世代に入る。新しい世代に入るにあたって皆さんにどういうことを考えていただきたいか、これまでとは違うのだ、どのように違わなければいけないか。一言でいえば、アメリカにとんでもない馬鹿な大統領が生まれましたので、早くアメリカ離れをして欲しい。しかしアメリカ離れをするといっても、日本はフランスやドイツのようにきちんと自国の軍隊を持っているわけではありません。国を守ってもらっているという引け目もあって、そう簡単にアメリカ離れはできませんが、気分的にはアメリカ離れをして、それではどこに関心を持つべきであろうか。これは、幕末以来アメリカなどより遙かにお世話になっているフランスやドイツでありまして、そういうことについて皆さんに考えていただきたいというのが、今日の話の趣旨であります。

今ヨーロッパはドイツ、フランスを中心にして非常に大きな躍進を遂げつつあります。その大きな原因の一つが、2年前に何と39歳の若さでフランスという大国を率いることになったエマニュエル・マクロンという、3歳でギリシャ神話がある程度わかったといわれている大変な天才であります。この間日本にみえたときに親しくお目にかかる機会がありましたが、そういう若手がどんどん出てきてヨーロッパは生まれ変わろうとする時期を迎えています。ところが、日本は何とんでもアメリカの影響下にあります。そのためヨーロッパというと、ポピュリズムが台頭しているとか、ユーロの危機だとか崩壊するのだとか、悪いニュースばかり報道されていて、実際のニュースが全然伝わっていません。このことが日本人の国際感覚を非常に狂わせていると思えます。

戦争前は日本で外国といえば、イギリスやドイツ、つまりヨーロッパだったわけです。有名な福沢諭吉が、『西洋事情』という幕末最大のミリオンセラーの中でいろいろな外国の事情を説明しています。その彼が言った言葉に「脱亜入欧」という言葉があります。つまり、日本列島は地理的にはアジアに位置しているけれども、しかしアジアの隣国と付き合いただけでは日本の発展はない。ヨーロッパの真似をしてヨーロッパに学ぶべきだ、というのが「脱亜入欧」であります。「脱亜入米」とは言っていないのであり、260年前にはアメリカに学ぶべきものがなかったということです。小栗上野介や勝海舟など気の利いた幕臣達は、イギリスやフランスやドイツといったヨーロッパの良いところを学んで日本を近代化し、それを明治政府が引き継いでいったわけです。

アメリカというのは第二次大戦で大敗するまで、日本人にとって身近な大国ではありませんでした。

歴史というのは皮肉なもので、日本はイギリスには圧勝しています。プリンスオブウェールズというようなイギリスが誇る戦艦を緒戦早々に沈めてしまう。東洋の真珠といわれる大英帝国の要の国であったシンガポールも占領してしまう。しかし、後になって参戦したアメリカにミッドウェイから始まって大敗していき、広島、長崎に原爆を落とされてとどめを刺されました。そしてそれに留まらず、啞えパイプで厚木に降りたマッカーサーのもと、完全にアメリカの占領下に置かれ、憲法まで作ってもらって今日があるのです。つまり、ものの考え方、見方といった知的覇権、知的 hegemony までアメリカに左右されることになったのだと思います。

私はアメリカに7年ほどいたのでアメリカのことは知らないわけではありませんが、ヨーロッパと比べると本当に貧しくて、物事の考え方も極めて一面的で、駐在中アメリカに感心するところはありませんでした。衣食住のうち住居だけはいいものの、食事は不味いし着るものもあまり素敵ではない。そういうわけで私はアメリカを良いとは思いませんでしたが、日本人の多くはアメリカのものの考え方にすっかり染まっているわけです。

このアメリカがどうして世界を支配しているかという、アメリカをつくったものが地縁血縁ではなく理念だからです。アメリカの建国の父達が何を考えたかという、ヨーロッパなどで宗教的な迫害を受けてアメリカにやってくる、そこで自由と民主主義など制度を整備した。アメリカはそういう理念によって結びついた人達、つまり人工国家なわけです。ところがその理念が大分おかしくなってきました。ドナルド・トランプという大統領は、ワシントン・ポストによると就任して2年間で8158回嘘をついていて、一日平均では16.5回になるそうであります。彼が嘘をつかなかった日は82日あるそうですが、これはゴルフをしているときだそうです(笑)。そういう人がアメリカを率いているわけです。次期大統領にもなるかも知れませんが、それは願い下げにしたいというのが全世界の世論です。

ニューヨークに1922年にできた外交問題評議会という権威ある評議会が機関誌を発行しています。この雑誌はアメリカの最高峰の頭脳を結集した素晴らしい雑誌で、政府の息のかかった雑誌です。ここに先日有名な論文が発表されました。その論文で、「この2年間のどこかで世界におけるアメリカの覇権が失われた」ということが述べられています。アメリカの覇権 (hegemony) というのは、アメリカとソビエトが世界を分断して対立していた冷戦が30年前に終わって、唯一の超大国であるアメリカが世界を治めていくという状況のことですが、これがずっと続くことが期待されたわけです。しかし、事実はそうではなくなりました。外交問題評議会の論文では、有名なジャーナリストであるザカリアが、「2年前に世界を治めていたアメリカの覇権が潰えてしまった。全ての死がそうであるように様々な要因がアメリカの死に関係しているのだ」と書いています。2年前というのは、まさにトランプ大統領が当選した頃のことです。世界の7つの海を支配していたイギリス帝国主義は、アメリカのような新興国が出てきたりドイツや日本が出てきたり、といった他国の台頭によって覇権を逸したのですが、今回アメリカの覇権が失墜したのは、他ならぬ自国のワシントン自体が世界と関わるのが嫌になってきたからです。歴史で初めて、世界的にも珍しい「覇権の自死」が起こった、それが今のアメリカだということです。

トランプという人は沢山の人の相手をする話し合いを嫌います。多くの首脳が集結するG7などの場で、きちんとした交渉をするにはトランプの頭脳では無理だからです。けれども、元々は不動産屋ですからサシの交渉には強いわけで、例えば安倍首相と二人だけになれば脅しをきかせることはできます。そういうわけで、苦勞してつくられたTPPも離脱してしまった。これからの地球を温暖化から守っていく、というパリ協定からも抜けてしまった。ユネスコからの脱退も表明し、どんどん世界に背を向けています。それがアメリカの「覇権の自死」だというわけであります。こういう中でこれからどうなっていくのか。日本には中国などと面と向かって向き合うほどの武力はありません。世界は今、大変困っている状況にあります。そしてよく考えてみると、日本は覇権を失ってしまったアメリカにいつまでもぶら下がっているわけにはいかない、もう少しアメリカ以外と仲良くして補っていかなければいけないわけです。それが誰かとよく見回してみると、やはりヨーロッパしかありません。日本と同じく法の支配や文化がきちんと尊重されている、フランスやドイツと仲良くしていかなければ

ばいけません。

## 2. フランスの強み

そこで、これから本題のフランス、ドイツの話を進めていきたいと思えます。日本の皆さんのフランスに対する見方は非常に偏ってしまっていて、せいぜいフランスで日本に尊敬されているのはファッションとかグルメとかワインとかそういうことです。NHKは世界のどの国が好ましいか、という世論調査を毎年やっていますが、日本の女性は1年として裏切ったことはありません。日本女性にとって一番良い外国はずっとフランスであります。ところが日本の男性は最も良かった結果でも11位、大体13位から14位ぐらいです。それは日本人にフランスがひ弱な国、女子供が好きな国というイメージがあるからではないかと思えます。

これは全くもって失礼なこととして、これからフランスが何故素晴らしい国かということをつつのポイントを上げて説明いたします。まず、世界地図を頭に浮かべていただきたいのですが、フランスの形は六角形で、これがヨーロッパの中心にでんと構えております。西側は大西洋、南側は地中海。いずれの場所も魚は美味しいし、素晴らしい海の景観もある。海の幸だけでなくアルプスがあり地味も豊かで、アメリカに迫る農業大国です。フランスに行かれることがあったら、是非朝市に行ってください。そこに並んでいる野菜や果物は、日本のように形は良くないかも知れませんが、見る人が見れば一目で分かる、素晴らしいものです。だから美味しいフランス料理ができるわけです。有名なジョークがあります。ドイツ人が隣のフランスを見て、なんであそこはろくに肥料もやらないのに地味が肥えていて、あんなに美味しいものがどンドンできるのだろう。そして「神様はフランスを依怙贖している」と文句を言った。これを聞いた神様はバランスをとるために意地悪なフランス人を天から遣わしたというものです。これはドイツ人のフランス人に対する相当の皮肉ですね。多国がこれほど羨むほどの地味豊饒の国土がフランスにはあります。その上、これは皆さんあまりご存じないかも知れませんが、フランスの民間が持っている金の延べ棒は、日本銀行の所有量よりも多いのです。フランスでは地の利を何代にもわたって十分に活用していますから、単なるGDPの数字だけでは測れない富の蓄積がすごく多い。そういうフランスの底力というものを、日本人達は知らないということです。これがフランスの第一の強みです。

二番目のフランスの強み、これは申し上げるまでもなく文化です。また教育でもあります。フランスは実に教育に熱心な国です。現在日本で幼稚園の無償化などと言っていますが、フランスでは終戦後から幼稚園その他はずっと無償です。高校までの教育を国が面倒をみています。そして、幼稚園の頃から哲学を教えます。哲学といってもカントやヘーゲルなどといった哲学ではなくて、フランス人としての哲学は、あらゆることを疑ってみることであります。物事を疑ってみることを教えることがここでいう哲学なのです。そして、小学校からは読み、書き、そろばん（コンピュータ）を教えます。小学校のカリキュラムではフランス語つまり国語が10時間、算数5時間。あとの時間で歴史、地理、コミュニケーション、図画工作を3時間くらい教えます。つまり朝から晩まで読み書きと算数を教え込むわけです。通信簿には三つのことしか書いてありません。素行と国語と算数の評価のみです。希代の天才だと申し上げたマクロン大統領は、2歳半の頃からおばあさまがずっと面倒をみていたのですが、保育園から帰ってくるとショコラを飲ませて、そしてフランス語の詩を朗唱させたといひます。彼にかかると流れるようなフランス語のスピーチが生まれるわけですが、それは2歳半の頃から鍛えられてきたからだと思えます。そしてフランスでは高校になると、文科系では一週に8時間哲学の授業があります。政治経済の人達は5時間、理系でも3時間あります。ここではカント、ヘーゲル、サルトルなど、難しい哲学を勉強します。1808年にフランスを統べていたナポレオン一世が勅令を出して、バカロレア＝大学入試資格試験を制定しました。フランスでは一定年齢になった全生徒が大学入試資格試験を受けます。文系も理系も哲学は必ず受けなければなりません。この試験は記述式で、4時間で5ページの論文を書かされます。一昨年の哲学の出題は「人は死について学ぶ必要があるか」というもので、これを16～17歳の学生に哲学的に論じさせるわけです。見る方も大変です。6500人の哲学の先生が動員されて、60万人の回答論文を見なければなりません。因みに、5年

前の哲学の試験のお題は「幻想のない情熱はあり得るか」です。このようにしてフランスの若者は16歳くらいから鍛えられているわけです。大学入学資格試験というのはふるい落とすのが目的ではなく、できるだけすくい上げるのが目的です。ですから80%位の人が大学入学資格を得るわけです。

受かった人達の11%の人達は政府の命令で、高校の上にある塾のようなクラスに入って、そしてグランゼコール（名門校）に入るため、ふるい落とす試験である名門校入学試験を受けます。名門校の一つで、私がずっと教師をしていた理工科学校エコール・ポリテクニークは1学年が100人くらいです。国家は7万円を支給して、全寮制度で1学年100人くらいの学生を鍛えに鍛えます。そしてさらにENA＝高級官吏養成所を経て役人になるというわけで、ここを出ると入社と同時に民間会社なら課長補佐、官僚なら中央官庁の課長補佐に抜擢されます。マクロン大統領は天才でしたから、ロスチャイルド銀行の副頭取になんと24歳の時に抜擢されました。26歳の時には日本円で13億円の給料をもらいましたが、銀行はこういうもののだということが分かったということで、給料が2000万円に下がるにもかかわらず、銀行を辞めて大統領府に経済顧問として入りました。その後大臣となり、2年前に大統領になったわけです。そういう英才教育にものごく力を入れる、というのがフランスの非常に大きな力になっていると思います。そして、その上に更に文化の力というものがあります。

三つ目の強みはその文化の力です。梅棹忠夫さんが良いことを述べられています。それは「文化は最上の安全保障である」というものです。第二次大戦ではフランスはドイツに簡単にやられてしまって、ドイツの占領下にありました。第二次大戦の末期にドイツは敗色濃厚になって、ドイツ軍はパリを捨てて引き上げることになりました。これに際して、ヒトラーはパリ駐在のドイツ軍司令官に、パリを徹底的に破壊してから引き上げろと命令しました。ところがこのドイツの司令官は教養ある人で、この都（パリ）はフランスだけではなく人類の宝であるから破壊するわけにはいかないと思った。ヒトラーの命令に逆らえば殺されるのが明らかだったのに爆撃をしませんでした。そのことを梅棹先生はおっしゃっているのです。文化があれば、原爆を一つや二つ持っているよりも安全保障上良いということです。過去、日本でも同じように文化の恩恵に浴したことがありました。日本の大変な専門家であるハーバード大学のウォーナー博士を中心とする知日派の学者達は、太平洋戦争末期にアメリカ軍が日本を爆撃するときに京都、奈良だけは絶対に爆撃するな、という陳情書をルーズベルトに出します。一時は長崎ではなく京都が原爆投下の対象だったのが、この陳情書によって京都に代わって長崎が投下目標になったのです。長崎には申し訳ないことですが、京都や奈良のような素晴らしい文化を持つことの方が、安全保障上大きな力を持つという良い例だと思います。

フランスの強みはまずは地の利、そして教育の尊重と文化。加えて、官僚の良い面＝キャラを引き出すということもあり、その行政の長が大統領であります。その大統領の中で、何と言っても素晴らしい人は、シャルル・ドゴールという第五共和制を作った大統領でありました。日本の報道陣は長年何百人もの特派員をフランスに送っていますが、その何百人の中でドゴールさんにインタビューできたのは私一人です。ドゴールさんという人は誠に身边が綺麗で、国民のために絶えず世界の動き、これからどうなるかを見ている。その一端を一つご紹介します。彼はフランスの植民地だったインドシナ、ベトナムを早くから放棄することを主張していましたし、アルジェリアの独立も早々に認めて右翼から狙われて殺されかかったりしています。フランスがベトナム、ラオス、カンボジアから手を引いた後に入ってきたのがアメリカで、そういうことはしてはいけないと訪仏したケネディ大統領に説教したのですが、そのときに彼が言った言葉をドゴール回顧録から引用させていただきます。「アメリカがベトナムに介入すれば、果てしない泥沼に足を踏み入れることになる。一旦民族が目覚めた以上、いかなる外国勢力であれ、どのような手段を用いようとも決して支配することはできない。あなたが民主主義や自由といったイデオロギーを持ち出してみても、事態は変わりません。アジア、中東で我々西欧がなすべきことは、彼等の土地に介入し彼等に代わって何かをすることではなく、彼等を助け、貧しさや文明が彼等に与えた屈辱感から彼等を立ち上がらせてやることです。私はこのことを西欧の名においてあなたに申し上げる。ケネディは注意深く傾聴した。しかしその後の成り行きが示す通り、説得はされなかったのである。」こういう人が一国の上において、優秀な官僚を操縦していくと

というのがフランスという国であるということでもあります。

私はマクロンという人が一番似ているのは田中角栄だと思います。10年前にあった人でも忘れない、そういう考えられないような記憶力を持っている。私の言い方を許していただけるなら、人工知能付きのフランスの田中角栄と言っているかと思います。これがマクロンという人です。そして、既に二つの奇跡を成し遂げています。第一に、フランスでは労働組合や左翼の力が強いために、歴代大統領が何度もトライしてできなかった労働時間の規制を平然と敢行したこと。そして第二に国鉄の改革、これをあらゆる既得権益を封じて成し遂げたことです。この二つをやっただけでも大変なことですが、外交面も含めて素晴らしいことを他にもやっています。皆さんもご存じの通り、ジレ・ジョーヌと呼ばれる運動で、黄色いベストを着た暴徒が街を破壊したりしましたね。側近達は妥協しろと言ったのですが、妥協すればまた同じことが起きるということで、自分は庶民の中に飛び込むと言って護衛だけを連れて黄色いベストを着た人達の中にマクロンは入っていった。護衛を除けばたった一人ですが、何百人に囲まれていろいろな質問をされても天才なので全部答えられるわけです。さすがの黄色いベストを着た群衆もあきれて、この大統領は並の人間ではないということ、事態はすっかり沈静化しています。そういうすごい度胸も持っているのがマクロン大統領です。大変幸運なことにこの人は日本が大好きで、この間の安倍さんとの会談も上手くいきましたし、彼がいるうちはフランスのルノーが日産を乗っ取る、というようなケチなことをすることは無いと思います。むしろ、ルノーと日産が組んで、トヨタ、GM、メルセデスを凌駕するというのが彼の本心であるということを知っています。また、彼は年寄りをナンパする男、日本式に言えば年寄り殺しと呼ばれています。本当に魅力的な人物で、年寄りも私も含めて皆参ってしまいます。この間もトランプを完全に丸め込んで、G7を大成功に導きました。これらのことから、フランスは大変な素晴らしい国であるということ、を是非皆さんの頭の中に入れておいていただきたいと思います。

### 3. ドイツの強み

次にドイツです。先ほどフランスの強みの一つが地の利であるというお話をしました。フランスは「地の利」で神様に依怙贖罪されていると申し上げましたが、ドイツの場合それに相当するものは「人の利」だと思います。1990年にドイツに行っていたとき、前年に冷戦が終結し、アメリカとソ連が妥協してドイツを再統一することになりました。そのとき気が付いたことは、ドイツが2000万人もの極めて働き者の労働者を自分達の仲間として受け入れたということです。この2000万人は社会主義下において労働には後ろ向きだったので、メルケルさんは苦勞したと思いますが、ドイツ人は基本は働き者なのです。こんなすごい利益はなかなかありません。今ではヨーロッパで一人勝ちの様相を呈しているその理由は、何と言っても一度に2000万人の優秀な労働力を得たからということに尽きます。

もう一つのドイツの強みはフランスの「文化」に相当するもの、「技術」の力にあります。これについては神話が沢山あります。例えば、ベンツとホンダが正面衝突するとホンダはペしゃんこになるがベンツはかすり傷だけ、これは本当のことです。私がこのことを本田宗一郎さんに尋ねると、ベンツは車は潰れないかも知れないが乗っている人が死んでしまう。中の人間が助かるようにホンダではクシャットとなるように作っているのだ、と負けず嫌いの彼はそうおっしゃっていましたが、ドイツの車は極めて堅牢であります。スキャンダルはありましたが、何と云ってもフォルクスワーゲンがダントツの世界一の車メーカーです。フォルクスワーゲンというのは、ドイツ語で国民車という意味です。ヒトラーが行った数少ない善政の一つで、ドイツ国民に空冷の優れた車を作って普及させた、そういう素晴らしい技術の力が依然としてあるのです。そもそもロケットを兵器として実戦に供したのはドイツ人ですね。ですから、ドイツが負けたときソ連軍はドイツのペーネミュンデのロケット研究所に殺到して、ロケット技術のノウハウをかつさらいました。アメリカはフォン・ブラウンをはじめとするロケット工学者を連れ帰りました。その両陣営が作ったロケットが宇宙ですれ違った時に、なんとお互いグーテンモルゲンと挨拶した、というジョークがあります。核兵器もアインシュタインやオッペンハイマーなどユダヤ系ドイツ人が開発していますから、事程左様にいろいろな技術のもとを辿る

とドイツが発祥であり、極めて高い技術の力があるわけです。

そして三つめの強みは、フランスが幼稚園から鍛えて「優れた高級官僚を作り上げていく」のに対して、ドイツは「政治家を育てる」ことです。

私は幼少の頃フランスに住んでいたこともあって、フランス語は母国語のようなものでしたが、小学校5年まで日本語ができませんでした。NHKに入社した頃、戦争が終わったばかりということもあって全国12000人のNHK社員の中でフランスができる者が一人もいない。ところがフランスがホーチミンに完全に負けてしまい、その後始末の取材にフランス語ができる人間が必要になった。入社してきた中にフランス語が良くできる奴がいるということでテストを受けて受かって、入社1年でベトナムに取材に行かせてもらいました。普通はNHKに入ると地方勤務を経た後東京に戻り、その中でフランス語や英語ができる者が国際部に行くということになるので、10年くらいかかってしまいます。私は最初に25歳の時に海外取材に行き、中東の取材などを経て20歳台で第二の祖国フランスに行かせてもらいました。こういうと聞こえはいいですが、当時NHKがヨーロッパに出していた特派員は私一人なのです。ヨーロッパ総局長というのはいませんが、これは10ヶ月毎に代わるのです。将来のNHKのために当時の会長がニューヨークのアメリカ総局長、パリのヨーロッパ総局長共に10ヶ月毎に交代させて経験を積ませていました。その下に一人20歳代の私がいて、それこそいろいろな勉強をさせてもらいました。そのおかげで、これから先のお話ができるというわけでありませぬ。

当時、ドイツの出来事もパリにいた私がカバーしなければならない。今はベルリンですが当時はボンに西ドイツの首都がありまして、その近くのバード・ゴードスベルクという温泉地で、ドイツの社民党が党大会を開きました。そこで有名なバード・ゴードスベルク綱領が制定されました。これは社民党がマルクス・レーニン主義の階級闘争を否定して、国民政党内に脱皮し、以後、暴力革命思想はドイツ社会民主党とは関係ないという宣言でした。ドイツは当時、アメリカ、ソビエト、イギリス、フランスに共同管理されていて、バード・ゴードスベルクのすぐ先に世界最強のソビエト陸軍がいたにも拘わらず、ドイツの政党がこれからは階級闘争は終わりで大人の政治をやっていくのだ、と世界に向かって言い放ったのです。この宣言のおかげで社民党はその後の連立政権に加わりませぬし、自分達で政党を率いて労使協働の道を進んでいくこととなります。その後の改革もあってドイツの社会資本主義はライン型資本主義、またの名を社会的市場経済といわれるようになりました。株式市場を中心とする米英型の金融資本主義に対して、あまり格差の生じない道を歩んでいくわけでありませぬ。この路線が見事に成功して、現在のドイツはG7の中で唯一財政黒字国です。しかもその黒字は何とGDPの9%にもなるのです。こういった政治の賢さというのは、日本が真似のできないところでありませぬ。

生活の質も非常に高い。ドイツの労働者は150日以上のお休みを取ります。一部の企業では労働時間を28時間/週に短縮しています。5時きっかりにはどの道も完全に渋滞、これは5時で皆一斉に帰宅するからで、つまりドイツでは日本のように超過勤務などしませぬ。ドイツの生産性は、5時から超過勤務に入り、権利がありながらも休みに取らない日本の労働者の1.5倍です。休みというのは現代社会においては義務であり、権利ではない。むしろ偉い人ほど1年に150日くらいは休んでいただきたい。生産性さえ上がれば28時間/週の労働で、GDPの9%の財政黒字が出せるのですから。ここに皆さんにお勧めしたい本があります。これは私のNHKの後輩で熊谷徹という人が書いた本で、一つめは「ドイツ人はなぜ、年290万円でも生活が「豊か」なのか」、二つめは「150日休んでも仕事が回るドイツ」、三つめは「5時に帰るドイツ人、5時から超過勤務する日本人」です。興味がある方は読んでみてください。

#### 4. 強固な仏独友好条約、アーヘン条約の重み

違った国の企業が合併するということがあります。例えばルノーと日産です。ですが、国同士が一緒になる、しかもそれが大国同士というのは歴史上例がありません。この検討が56年間にわたり続いていて、さらに一段と進みつつあるのがフランスとドイツの国の合併であります。この歴史的な

試みは日本のメディアでは殆ど取り上げられていません。今から56年前の1963年1月22日、フランスのドゴール大統領と西ドイツのアデナウアー首相が、パリのエリゼー宮殿で仏独友好条約に調印しました。それから56年、フランスとドイツは一つの国になるべく、着々といろいろな手を打っています。今年はこの仏独友好条約をさらに発展させ拡大推進することにして、ドイツのアーヘンでマクロン大統領とメルケル首相がアーヘン条約に署名をしました。これにより、両国はさらに合併の速度を速めることを決めたわけです。政治家には私心がなくて祖国の将来のことを考えて行動するstatesmanといわれる立派な政治家と、駆け引きだけが上手いpoliticianといわれるいわゆる政治屋の二種類の人間がいます。残念ながら政治屋の方が多いですが、フランスとドイツは立派な政治家に率いられてきたと思います。

56年前の条約締結で最初にやったことは、仏独青少年事務所の設立でした。先の大戦の轍を踏まないように、まず青少年の交流をやって彼等の考えから変えていこうという狙いで始まって、これが既に56年続いているわけであります。両国で2200~3000万人の青少年がホームステイなどで両国交流を続けてきました。現在は100万人のフランス青年が、ドイツ語を必修として学んでいます。逆に200万人のドイツの青年が、フランス語を必修で学んでいるという状況です。つまり、仏独の青少年は二つの母国語を持つように訓練されているわけなのです。79年からは大学の入学資格試験を仏独両国で運用することにしました。現在日韓では歴史認識の違いで軋轢が生じていますが、そういうことが起こらないように、フランスとドイツは40年以上にわたって高校の歴史教科書に同じものを使っています。両国の歴史家が総動員されて、歴史家の人達の歴史観の最大公約数をとって作られた教科書で学んでいるわけです。このように教育面でも両国は一つの国になりつつあります。それだけではなく既に商法の一部などでは同じ法律を使っているのですが、2020年には80項目の新しい政策を取り込んで、共同運用をさらに進めていこうとしています。また、日本はアメリカのおかげでボーイングしか買えずエアバスを買うことができなかつたのですが、ようやく日本航空がエアバス350を買いました。日本ではあまり知られていませんが、世界の空は今やエアバスに支配されているのです。このエアバスの心臓部を共同製作しているのはフランスとドイツであります。フランス語とドイツ語で放送される仏独共同出資の放送局も約30年続いてきております。こういったことが仏独間でどんどん進行しているわけです。

## 5. EUのルネッサンスの新体制とアメリカ政治の劣化

もともとEUというのは歴史も違えば文化も異なる色々な国の集まりですが、アメリカ、中国、インドといった巨大な国に対抗するために、27カ国が集まって共同しているわけです。43万人の人口しかないマルタと8200万人のドイツとが建前上は同じ一票を持っているのですが、そこはヨーロッパ的な知恵を駆使します。建前的な決定は27カ国全体の合意で決めますが、そこに至るまでにはフランスとドイツが同心円の中心にあって、その周りに譜代大名のごとくスペインやイタリアなど4~5カ国がいて、その周りにかつての共産圏だったポーランドやハンガリーといった国々がある。このような同心円状の共同体を作って米、中、インドなどに対抗していこうというのが今のヨーロッパの指導者達の考え方であります。そして最もヨーロッパが頼りにしている国のひとつが我が日本なのです。現在、ヨーロッパ製の食品などがどんどん安くなっています。それは2月に発効した日本とEU間のEPA=経済連携協定に依るものです。今後もこの協定によって、日本とEUの経済的な結びつきが強まっていきます。日本はEUとはEPAで、その他の国とはTPPで、アメリカとは2国間協定でそれぞれやっていくということで、貿易では世界の中心的な存在になっていきます。そのためにも同じような理想を持つフランスやドイツを中心としたヨーロッパの国々と、今後もより強く共同していかなければいけない、これが私の一番申し上げたいことでもあります。

今ヨーロッパで非常に売れている本があります。『悲しきアメリカ』という本です。これはフランスのテレビ局でワシントン支局長を5年やった人が書いた本で、日本語訳も出ています。その書き出しで著者はこう言っています。「トランプの勝利は私のいう悲しきアメリカの勝利である。人々は一人のお祭りの大道芸人の腕の中に飛び込んで行ったのだ。彼はリアリティ番組のプロで、彼の誇張、侮辱

的な表現、暴言などは大統領に全く相応しくない。しかし、エンターテイナーとしては一応の成功を収めることができた。アメリカ人は選挙民というよりはエンターテインメントの観客に過ぎなくなった。」というもので、非常に説得力があります。また、アメリカには非常に過ぎたものと非常に足りないものの両極端がある。過ぎたるものとしては過剰な武装社会であること。アメリカ人の3人に1人は銃を持っていて、しかも5人に1人は自動小銃を持っているという過剰な武装社会です。そして過剰な弁護士社会であること。世界の弁護士のうち10人中7人がアメリカ人であり、アメリカの上院議員の60%、下院議員の40%は弁護士です。つまり、そういった弁護士が稼ぐために犯罪を起こしてその弁護をしている、と言いたくなるぐらい弁護士が多い社会だと著者は言っています。そして、アメリカにとって最も悲しいことは、この数十年来アメリカという国は戦争がなかったことはないということです。朝鮮戦争以来ずっと戦争続きで、しかもそれらの戦争に勝ったことが一度もない。朝鮮戦争で唯一連合軍として中朝陣営に勝ったと言えるかも知れません。一方、足りないものは何かというと頭脳である。ノーベル賞にアメリカ人が多いといいますが、国籍的にアメリカだというだけなのです（例えば今年のノーベル化学賞は一人は日本人ですが、二人目は研究のためにアメリカにいるイギリス人、もう一人も同じくアメリカの大学で研究したドイツ人）。

トランプという人は、知的水準も怪しい上にその学歴詐称も公然の事実になっています。アメリカでは名門大学は全て私立で、多額の寄付をすると自動的に入学させてくれます。ですから、ハーバードなどでも何割かの人がそういったことで入学しているというようなことも、この本には書かれています。

最後に私が最も強く申し上げたいことを述べたいと思います。日本はヨーロッパのことがよく分かっていない、と冒頭でも申し上げました。例えば、竹森俊平さんという慶応大学の有名な学者さんが「ヨーロッパ統合ギリシャに死す」という本を書かれています。もう一つ「ユーロ崩壊、そしてドイツだけが残った」という本も書かれています。ですが、二つとも全部間違いでした。9年前のギリシャ危機のとき、ヨーロッパ統合が死すといったけれども、今ヨーロッパは大変調子がいい。また、浜さんという女性の学者はフランスとドイツは2012年の暮れには喧嘩別れするだろうという本を書きました。これも大間違いでした。これらはみな学者さんたちの間違いです。2017年にフランスで大統領選挙があって、有力候補とみられていた二人が決戦投票に残りました。その時日本の新聞の90%はマリーヌ・ルペンという女性の右翼候補者がマクロンという青二才に勝つ、という予想を立てました。ところが実際はマクロンが大勝するという結果でした。こちらは報道機関の間違いです。

これに関連して最後に一つ。

学会だけでなく日本の報道がアングロサクソン寄りで、フランス、ドイツについての報道が誤報続きであることを不満に思っているのが、わが国金融政策の責任者であるという事実です。2019年のフランス大統領選で日本の報道が全てマリーヌ・ルペンの勝利を予見していたために、マクロン勝利で東証が記録的値上がりとなった事実を、元大蔵省（現財務省）財務官の内海さんは日経紙に寄稿し次のように苦言を呈しています。「イギリスもアメリカの報道陣も敗戦国のドイツや似たような事実上の敗戦国フランスが牛耳るEUやユーロの存在が面白くない。ヨーロッパ大陸への呪縛のようになっている。日本のメディアがこのアングロサクソンの呪縛から解放されなければ、正確にヨーロッパをみることは出来ないし、日本の市場関係者はこの呪いにかかってはならない。」同じく榊原元財務官も私とのBSフジの番組の打合せの時、日本の学者やメディアの連中はフランス語やドイツ語の新聞を読まない（ないしは読めない）とこぼしていましたし、玉木元財務官も別の会で似たような見解を述べておられます。全く同感です。

これからの30年 generation では、是非皆さんも公平な眼でヨーロッパ大陸をみて下さい、ということをお願いして私の話をまとめさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。



## 磯村尚徳（いそむら ひさのり）先生のプロフィール

- ・ 1929年、東京生まれ。学習院大学卒。
- ・ 53年NHK入局。38年間の経歴の半分を海外で。  
インドシナ、中東、パリ特派員（1958～62年）を経てワシントン支局長（1965～71年）、欧州総局長、報道局長、専務理事待遇特別主幹などを勤めた。  
特に1974年からは、“ニュースセンター9時”の編集長兼キャスターを務め、現在の報道番組の原型を作り、ニュースを人気番組にし、““ミスターNHK”と呼ばれ、一世を風靡した。
- ・ 1995年パリ日本文化会館初代館長に就任（1995～2005）。また、フランス語最高審議会委員・ユネスコ事務総長特別顧問など、多くの要職を務めるとともに、TMF（日仏メディア交流協会）会長、その他、多くの日欧関係団体で、日本とヨーロッパの架け橋として活動している。
- ・ これらの功績に、1996年フランス大統領より“レジオン・ドヌール勲章オフィシエ賞”・国家功労賞・“芸術文芸勲章コマンドゥール賞”などを受賞。また、ジャーナリストの最高の栄誉である日本記者クラブ賞・上田ヴォーン国際記者賞、平成23年春の叙勲で旭日中綬章などを受賞。
- ・ また、フランス最高学府エコール・ポリテクニックで1997年以来18年間講演を続けた功により、2016年12月に（日本人としては異例の）名誉ポリテクニシャンに任命され、名誉あるナポレオン帽（ビコルヌ）を授かった。  
2019年2月、ルネサンス・フランセーズ日本代表部第一回栄誉授与式にてフランス語振興賞（メダイユ・ドール 金メダル）を受賞。

著書は、“ちょっとキザですが”シリーズ（講談社）・“あの時、世界は。磯村尚徳・戦後史の旅<i><i i ><i i i >